

ドイツの青少年芸術学校に関する研究 ——先行研究と教育理念の変遷に関する調査を中心に——

山成 美穂（短期大学部初等教育学科・准教授）

1. 本研究の概要

1. 研究の目的

本研究は、ドイツの青少年芸術学校¹に関する継続研究である。ドイツの青少年芸術学校は、児童・青少年²を対象とした芸術教育の学校外教育施設であり、1960年代に発祥し、現在までにドイツ各地で次々と数が増え、より一層の活発な展開を遂げている。その中には、公的な資金援助によって活動を支えられている施設も多く存在し、その活動は、社会的理解と経済支援に支えられる青少年育成の形として注目に値するものである。ドイツの青少年芸術学校の動向に着眼し、継続的に実態調査を行うことによって、学校外における文化的な教育の重視と民間優先の青少年教育システムの事例を学ぶ機会を得たいと考えている。同時に、ひとりの美術教育者として、児童・青少年に対して、なぜ、なんのために、どのようにして、どのような芸術教育を行うのか、自己の視座を高めたい。この研究により、児童・青少年に対する芸術教育の目的や方法についての示唆が得られることを期待している。今回の研究は、近年の青少年芸術学校の実態把握として、青少年芸術学校の教育理念を整理し、終日学校制の増加傾向など様々なドイツ社会の変化が青少年芸術学校の教育理念と活動に及ぼしている影響について、その実情を調査するものである。

2. 研究計画と方法

コロナ禍のパンデミックによる影響を考慮して、現地調査を中心軸に据えていた当初の研究内容をオンライン会議システムを利用した遠隔調査に切り替え、研究計画を2年間から3年間に変更して行った。各年度の研究概要は下記の通りである。

（1）2019年度の研究概要

2019年度は、現地における文献調査と視察訪問を行った。青少年芸術学校の歴史が最も長いNRW州³を訪問し、青少年芸術学校・文化教育施設連盟BJKE⁴の協力を得て情報収集を行った。また、NRW州にある2つの青少年芸術学校を訪ね、現状視察を行った。訪問した施設は、デュッセルドルフの青少年芸術学校「Akki-Aktion & Kultur mit Kindern e. V.」と、ケルンの青少年芸術学校「Jugend-Kunstschule Rodenkirchen e. V.」である。

（2）2020年度の研究概要

2020年度は、青少年芸術学校の近年の動向と教育理念に関する文献の整理を、『青少年芸術学校ハンドブック-コンセプト・構造・組織 (Jugendkunstschule Das Handbuch/2003)』、『文化教育ハンドブック (Handbuch Kulturelle Bildung/2012)』、文化教育の機関誌『Infodienst-Das Magazin fuer Kulturelle Bildung/2007-2019』を中心に行った。

(3) 2021年度の研究概要

2021年度は、引き続き文献調査を進めながら、オンライン会議システムを活用した遠隔調査を実施した。児童・青少年への優れた芸術教育の実践活動を行なっている青少年芸術学校校長と関係者へのインタビュー調査を行い、ドイツの青少年芸術学校の芸術教育理念と様々な社会問題の影響について、異なる状況からの見解を調べた。ドイツは2000年頃から終日学校制の導入が増加し始め、2015年からは大量の難民を受け入れ、2020年からは、コロナ禍による感染対策としての急速な遠隔教育の検討などの困難な問題を抱えている。社会の変化に伴い、地域における学校外教育施設のあり方に大きな変化が生じており、インタビュー調査による現在の生きた証人たちによる言葉を手掛かりにして、その教育理念の変遷と実情の把握を試みた。

II. 2021年度の成果報告

1. 教育理念に関する基礎研究

(1) 6つの教育理念

昨年度の報告書に記載したとおり、日本におけるドイツの青少年芸術学校に関する先行研究は少ないが、日独両国の主催によって実施されている日独青少年指導者交流プログラム⁵の芸術部門において、2000年から数年おきに現在に至るまで、日本からドイツ各地の青少年芸術学校への視察訪問が行われている。今回、その過去の報告書の内容を調べたところ、施設の設備概要に関する記述、実施されている教育プログラムに関する記述、青少年芸術学校に従事する教育者や生徒たちの様子などに関する記述が見られたが、青少年芸術学校の教育理念に関する具体的な記述は見られなかった。自著において、2003年までにドイツで発行された青少年芸術学校に関する文献を軸にまとめた「青少年芸術学校の定義付け」⁶から、青少年芸術学校の教育理念を次の6つの理念にまとめた。

- ・学校外領域における教育施設であること
- ・多様なジャンルの芸術表現が扱われること
- ・多様な芸術教育を通して、児童・青少年達の自己実現能力と社会的認識力の探求が行われること。
- ・青少年芸術学校における教育は、芸術の教育であると同時に、社会における文化教育の側面を担うこと。
- ・青少年芸術学校においては、教育の受け手である児童・青少年達の自発的な意志によって教育活動が成立すること
- ・青少年芸術学校で行われる表現活動について、児童・青少年達は成績の評価を受けないこと

(2) 2006年に NRW 州にて定められた青少年芸術学校の目標

NRW 州では、2006年3月22日 LKD⁷総会にて青少年芸術学校の活動目標が明示され、採択された。ここでは、①の6つの教育理念とは別に、青少年芸術学校の具体的な活動目標を明らかにするために、その内容を以下にまとめた。

青少年芸術学校の活動目標

〈1〉青少年芸術学校のセルフイメージ

文化教育は、児童・青年援助法第11条に規定された、青少年活動の中心的なポイントである。青少年芸術学校は文化的な青少年活動の機関であり、創造性と美的教育を促進し、人格の形成に貢献し若者が社会の文化的生活に参加できるような提案をする。文化的・社会的な能力、特に芸術やメディアに関連する知識や表現の可能性を、児童・青少年の創造的な活動に基づいて身につけられるようにする。具体的なプログラム内容は、児童・青少年の生活・彼ら特有の世界観や興味の多様性に対応する。青少年芸術学校とそれに類する文化教育機関は、異なる背景がありながらも、次のような共通の特徴を持つ。

- ・専門分野・メディアの多様性
- ・教育方法と学習環境の多様性
- ・文化的な教育と社会的な能力育成の同等の重要性
- ・生活環境との関連性
- ・社会参加とアイデンティティの確立の推進
- ・すべての児童・青少年のために開かれている
- ・地域社会への貢献
- ・他の青少年、教育、文化、余暇施設とのネットワーク化

〈2〉青少年芸術学校が推進すること

- ・芸術文化的な自己活動や表現力
- ・社会に対するオープンマインド
- ・社会的共同責任、社会的行動能力
- ・自己判断力とアイデンティティの確立
- ・参加、統合、民主的コミットメント
- ・男女共同参画の意識（ジェンダー主流化）

青少年芸術学校は、あらゆる社会階層や様々な生活環境にある児童・青少年を対象とし、地域のニーズに応じて、以下のようなプログラムにも取り組む。

- ・移住の背景を持つ子供や若者のための異文化交流のためのプログラム
- ・性別に特化したプログラム
- ・障がい者・障がいのない子ども・若者・高齢者のプログラム
- ・恵まれない地域でのプログラム提供
- ・社会的に不利な立場にある児童・青少年へのプログラム提供
- ・学校、幼児教育機関などとの連携プログラム

〈3〉重要事項

青少年芸術学校の活動は、その施設内で集中的に行われることもあれば、児童・青少年の生活環境の中で分散的・移動的に行われることもある。提供されるプログラムは主に以下の3種類に分けられる。

コース授業：造形美術、音楽、演劇、ダンス、パフォーマンス、文学、映像、写真、新しいメディア表現、テーマに基づく分野を超えたプログラムなど

特別プロジェクト：テーマ型、分野型、学際型、住環境型など

オープンなワークショップ：オープン工房、オープンアトリエ、余暇教育的なプログラム

上記に加え、特に青少年福祉や学校との関連、アドバイザー業務や各種情報提供、保護者支援のためのプログラム、公開イベント、設備の貸し出しなども行っている。

出所：LKD サイト⁸をもとに筆者作成。

2. 青少年芸術学校校長へのインタビュー調査のまとめ

近年のドイツ社会の変化による青少年芸術学校への影響と実情把握のため、2021年10月-11月にドイツの青少年芸術学校発祥の地である NRW 州の青少年芸術学校校長と首都ベルリンの青少年芸術学校校長と合わせて5名へのインタビューを実施した。実施概要は以下の通りである。

| | 実施日 | インタビュー対象者 | 都市名 |
|---|-------------|------------------------------------|--------------|
| A | 2021年10月16日 | ローデンキルヘン青少年芸術学校 ⁹ 校長 | ケルン (NRW) |
| B | 2021年10月14日 | クレアティブハウス青少年芸術学校 ¹⁰ 校長 | ミュンスター (NRW) |
| C | 2021年11月1日 | ブライベルガー青少年芸術学校 ¹¹ 校長 | アーヘン (NRW) |
| D | 2021年11月10日 | シャルロッテンブルグ青少年芸術学校 ¹² 理事 | ベルリン (BER) |
| E | 2021年11月11日 | フリックス青少年芸術学校 ¹³ 校長 | ベルリン (BER) |

【インタビューの内容】

1. 2000年以降の終日制学校への移行傾向による青少年芸術学校の変化と影響について
2. 大量の難民を受け入れたことによる利用者とカリキュラム内容の変化と影響について
3. 青少年芸術学校運営者の世代交代による教育内容や制度の変化と影響について
4. 時代の変化による青少年芸術学校の目的・理念の変化について
5. 児童・青少年の余暇活動のあり方と青少年芸術学校の教育理念の関係性について
6. コロナウィルスのパンデミックによる青少年芸術学校の変化と影響について

インタビューには、オンライン会議システム zoom を利用し、それぞれドイツ時間の午後13時（日本時間21時）から60分間～80分間程度を目安に行った。インタビュー内容については、事前に鎌倉女子大学学術研究所の倫理審査により承認を得た。各対象者には、上記の6項目について事前に書面で知らせ、自由に各項目について話をしていただいた。全てのインタビューは録画・録音記録をし、ネイティブの研究協力者によって書き起こしを行った後に日本語へ翻訳し、研究資料として保管した。

（1）2000年以降の終日学校制への移行傾向による青少年芸術学校の変化と影響

①ドイツの半日学校制と終日学校制の背景

ドイツは1900年代の初め頃から半日学校が普及し、学校は「授業中心」の学校として機能を果たしてきた。学校は知識を伝達する場であり、「人格形成や生活に関わる教育」は、家庭と学校外に委ねられ、スポーツ、音楽、美術、地域クラブなどの学校外教育が発達してきた長い歴史がある。しかし、母親の「家庭と仕事の両立支援」の観点から終日学校制の導入が検討されるようになり、2001年に起きた PISA ショックにより浮き彫りになった「学力格差是正」の問題がさらなる追い風となり、その数が増加している。ドイツの終日

学校は、日本とはシステムが異なり、「原則週3日以上（各日7時限以上）、終日のプログラムおよび昼食の提供を行う学校制度」のことを意味し、次の3つのタイプがある。^{14 15}

| | |
|-----------|------------------------------------|
| 全員参加義務づけ型 | 全員参加義務づけ型：該当校の全児童・生徒に参加が義務付けるタイプ |
| 一部参加義務づけ型 | 該当校の一部の学年や一部のクラスの児童・生徒に参加を義務付けるタイプ |
| 参加自由型 | 該当校の児童・生徒が参加を自由に判断できる。 |

2010年頃からドイツの多くの州で終日学校制が導入され、その多くは「参加自由型」の終日学校制が占めている。「参加自由型」は、従来の半日学校を軸に生徒の放課後の居場所づくりとしての終日学校という性格を持ち、学力格差是正問題の対応策としてだけではなく、母親の就業率の向上を目指す制度として認識されるものである。2001年に **KMK**¹⁶により策定された教育改革における「7つの行動分野」では、学校による教育的関与の拡大について論じられている。その中には、「教育や支援の拡充を目的に、学校及び学校外が協力し、終日プログラムを提供する。」という内容があり、終日学校の中で午後の授業や補習に加え、余暇活動の機会提供などの形で生徒を支援していくという方向性が打ち出されたのである。これにより学校教育と、長く半日学校制度のもとに培われてきた文化的で豊かな学校外教育とが交わり、連携する新たな形への模索と試みが検討されるようになった。

②終日学校制導入による青少年芸術学校の変化

参加自由型の終日学校制の導入により、地域における放課後の文化的な教育施設として活動をしてきた青少年芸術学校における活動形態と教育方法は大きく変化した。**A**は、2003年より国からの助成金を得ての終日制学校と連携したアートプロジェクトを開始した。まず1年間、3つの学校と共に実験的な試みが行われた後、そのプロジェクトに参加したい学校が10校に増え、協力関係が結ばれた。この取り組みのために**A**からは、各学校へのアーティストや素材の派遣が必要となり、また時間帯もそれぞれの学校の事情に合わせた対応が必要になった。それに伴い、従来の自前の施設におけるアートコースは、開始時刻を夕方に引き上げられたが、従来のコースを最低限の人数で提供することが難しく、コースの数は減少している。同様の話を、**A**と同じ**NRW**州の**B**、**C**も述べていた。現在の**NRW**州では青少年芸術学校の終日学校への参入は、一般的なものになってきているが、**B**によれば、学校との協力関係を結ぶプロセスは、決して容易なものではなかった。資金面の調達において**B**がミュンスター市と連邦政府から公的な援助を得るようになったのは2016年からと**A**より遅かった。2016年を契機に、公的資金援助を受けてダンス、演劇、芸術など、終日制学校に特定のアートプロジェクトを提供することが可能になって、そのシステムは大きく発展した。しかし、**B**は、「資金面の問題だけでなく終日学校との交わりにおいて、学校が通常行っている教育とは異なる種類の教育を提供することで、学校とは別の教育を提供し、成績は一切つけないという青少年芸術学校が持つ反学校的な立ち位置が、いかにして学校の中に参入するのかというプロセスが最も困難な事柄だった。」と

述べていた。Bは、「私たちは子供や青少年の長所を認識し、長所に取り組み続けることで教育の道をサポートするが、学校は実際には常に不足している生徒の世話をする。そのため、学校は生徒ができないことを常に正確に把握し、できるようになるまでそれに取り組む。私たちは、生徒たちができることを知り、それを基にしたプロジェクトで、彼らができることを、彼らの自発的な意思によって育成することをベースとする。彼らが達成できることを、私たちのプロジェクトで構築しようとする。その違いは、学校にとって最初、敵対するものや競争相手とみなされてしまうことがあった。しかし、本来どちらも学び合うことのできるものであり、青少年芸術学校は、学校教育を『補完』する教育である。そのことを学校側も、青少年芸術学校側の同僚たちも、何度も話し合い、時間をかけて協力関係が構築されていった。学校と連携するより以前の青少年芸術学校は、意識的に学校とは異なる教育的アプローチ、教育的信念を持ち、カリキュラム内容から学校を切り離していた。彼らは通常の学校とはまったく違うものになりたいと思っていたので多くの同僚たちにとって終日学校制への参入は、懐疑的な抵抗感が大きかった。学校と連携するようになれば、青少年芸術学校は学校と同じになってしまうのではないか？という違和感を乗り越えて行くことが大きな課題だった。」という。とまどいと模索の10年から発展の10年を経て、資金調達や、性格の異なる学校と青少年芸術学校間に橋を架けるプロセスの問題が徐々にクリアされ、現在では、NRW州には、学校との連携をしない青少年芸術学校は存在しないという言葉が、A、B、Cから聞かれた。Cからは、「青少年芸術学校から終日学校への出張型プロジェクトの実施は、多岐にわたる専門的な分野における芸術教育を可能とする専門的な設備環境の整う青少年芸術学校と違って、学校の設備環境で行われる以上、そのクオリティにおいて違いがあることは否めない。従来のコース授業の減少により、青少年芸術学校における質の高い専門的な文化的な教育プログラムに、児童・青少年たちが自発的に自由な枠組みで参加し、表現活動に集中し、また自分たちの学校以外の子どもたちとも出会う機会は、残念ながら減少している。しかし、多くの青少年芸術学校は、長期休暇期間にホリデープログラムを実施しており、それは現在も変わらず参加者が多く、人気も高い。そこでは、理想的な芸術教育が展開されていて面白いものになって生き残っている。」という話があった。

D、Eの首都ベルリンでは、青少年芸術学校のベルリンモデルが実施されており、ベルリンモデルでは、学校の美術教師が半官半民で青少年芸術学校に出向し、校長を務めている。そのため青少年芸術学校と学校は、「参入」という形ではなくはじめから「連携」しているという特殊な形式で運営されている。そのため、両者の間での補完関係がスムーズであり、青少年芸術学校から学校への出張型プロジェクトの他に、学校から学校教員が引率した形での青少年芸術学校での校外学習型プロジェクトが盛んに行われている。Dは、「生徒たちが、スタジオや木工所、写真工房をアーティストのように体験することは、慣れ親しんだ学校の環境で表現活動をやるよりも、ずっと面白く、クリエイティブな時間になる。その体験を通して、生徒たちだけではなく学校教師のプレゼンテーションスキルも向上する利点がある。」と述べ、Eからは、「午前中と午後の早い時間帯は、幼児のためのアートプログラムの提供も行い、遅い時間帯には、美大受験をする若者のための準備コースや成人向けの講座を行い、常にアクティブである状態を保っている。」という話があった。

(2) 2015年以降の難民受け入れによる利用者とカリキュラム内容の変化と影響

2015年からドイツは100万人を超える難民を受け入れたが、「すべての児童・青少年に対して開かれている」という教育理念を掲げる青少年芸術学校も、大きな影響を受けた。A、B、C、D、Eの施設においても、難民を対象とした様々なアートプログラムが実施されている。青少年芸術学校は、難民への対応に積極的な姿勢を取っていることがわかった。その際、言葉や文化的な背景の違いの問題はあるが、可能な限り難民の子ども達とドイツ人の子ども達が混在したプログラムを実施する方向で行われている。Aは、写真を撮ったり、小さなオブジェを作成したり、フロッタージュをしたりして、絵という形式の言語で、難民の子ども達とドイツの子ども達を引き合わせるプロジェクトを試みた。また、Bは「ふるさと」をテーマにしたプロジェクトを集中的に実施し、難民の子供達とドイツの子ども達、海外からの講師陣も多く取り入れ、ドイツで生まれていない参加者が多い中で、「文化的に自由な文脈で、あなたにとって祖国とは何かを子供たちに伝える機会」をセッティングし、一緒にプロジェクトに参加することを通して難民の子ども達がドイツ社会に溶け込んで行くことを試みている。C、D、Eも同様に、アートの手法を取り入れた様々なプログラムに着手している。編み物やテキスタイルなどの手工芸を手掛かりに異なる文化背景にある参加者が一緒に参加できるプログラムを可能にできることがアートの手法を用いた教育の強みであることがわかった。Cは、「青少年芸術学校で行われるアートプログラムは、言葉の通じない国での自己表現の機会であり、難民に合っていて、彼らにとって重要だと感じている。」と述べていた。

(3) 青少年芸術学校運営者の世代交代による教育内容や制度の変化と影響

当該テーマに対しては、様々な見解があった。Aは、初代の校長であるが、長年の間一本柱としてやってきた自身の引き継ぎについては、引き継ぎの長期的な計画を立て、自分一人ではなくチームで責任を背負える準備を始めている。Bは、「組織のあり方は人に依存するのではなく制度と連動するべきである」という考えから、元々チームで仕事をするスタイルを取っている。年配の運営者の利点は、経験が豊富であり、責任者として資金調達と枠組み条件を整えることに集中することができるが、若い世代の同僚とともにチームで運営をする姿勢を大切にすることで、子ども達にとって魅力的な新しい教育内容を大切にするという利点があり、チーム間のコミュニケーションと相互接続によって、運営者の世代交代がそれほど激しいものにならないよう運営の構造を意識的に作っている。Cは、自身の青少年芸術学校で子ども時代から育ち、生徒、講師、運営者のそれぞれの立場を経験している背景から、運営者の世代交代によって、扱われるテーマやマルチメディアの導入などの内容の変化はあるはずだが、骨格となる基盤は維持されるべきだと主張している。世代交代があっても維持されるべき青少年芸術学校の基盤は、「私たちは常に自発的にプロジェクトに参加してもらうことを基本としているということ。そして、私たちも非常に自由に仕事をしているということ。東欧のアートスクールを見ていると、とても学校的で、授業があって、先生が前に立ってやり方を説明してくれる。でも私たちの場合は、実験が前面に出てくる。子どもたちは自分で何かを作り、素材やアイデアと向き合いながら、自分のスタイル、自分のアイデアを発展させていく。私たちにとってアートの指導者とは教師ではなく、仲間である。子どもたちのアイデアを実現するために伴走する。この

自由な活動と自発性がミックスされてこそ、青少年芸術学校は機能する。手仕事であろうと、マルチメディアだろうと、それが基盤であることに変わりはない」と述べている。ベルリンのDもまた、「世代交代では、若いリーダーは、以前よりもデジタル化、インターネットに親しんでいるということである。それ以外は、コンセプト的には世代交代してもそれほど大きくは変わらないと考える。」と述べている。ただし、「ベルリンモデルが維持されなくなった場合に、学校と密接な関係を持つ先生というつながりがなくなり、それが保証されなくなってしまうとしたら大きな構造的な問題が生じる。」という見解も述べていた。Eは、自身が前の代からの引き継ぎにおいて設備から内容まであらゆる面で刷新した経験から、「若者が何を望んでいるのか、いつも若者から学ぶということを大切に、変わっていくこと、より拡充していくことが必要だと感じている。」との見解を示していた。

(4) コロナ禍のパンデミックによる影響

2020年3月からのコロナ禍のパンデミックによって青少年芸術学校は、これまでの教育活動を、オンラインによるアート教育に切り替えるなど、慣れない業務、事前に予想することが難しい技術的な課題に直面した。以前は、喜びと出会いへの意欲に満ちて青少年芸術学校にやってきて、何の心配もなく芸術的な試みにチャレンジすることができた児童・青少年達の様子にも変化が生じた。C、Eは、「子どもたちは、ロックダウンをはじめとする先の見えない感染対策の月日の中で、多くのルールにとても脅かされ、人と一緒に過ごすこと、つまり集団生活をとても恐れていることに気づかされた。」「子どもたちは、病気が移るのを恐れて、自由への渴望と行動を制限しようとする気持ちの葛藤の中にいる。家の中にいることは寂しく、外に出たい。感染すれば、また制限が増えてしまう。マスクをつけたくない、隔離されるのが怖いという若者もいる。彼らは、またロックダウンして、家の中でコンピュータでしか作業できないことを恐れていた。」と述べていた。ロックダウン下でのA、B、C、D、Eの対応は、デジタル機器を利用したオンラインによるプログラム提供などのデジタルツールの開拓による対応、郵便やメールなどの文通によるアナログの対応、または、道具の貸し出しをしてオンラインを通じての指導をするなどのハイブリッドな対応など様々であるが、活動を停止しなかったという点で共通している。Aは、「不自由や不可能な制限が多いコロナ禍でも工夫をしてアートプログラムを続けている理由は、子どもたちが制限された世界以外の何かを得られるようにという思いと、また全てが元に戻った時に青少年芸術学校に来てもらえるように、繋がりを保つため」と述べていた。これらの対応が可能だったこと背景としてBは、「パンデミックになってすぐに、青少年芸術学校の活動に対し国や州からの十分な経済支援が続けられ、それにより短時間労働や閉鎖の心配から解放されていたことが、とても大きかった。」と述べている。ロックダウン後には、基本的な感染対策としてのマスク授業、手洗い、物品の消毒、ソーシャルディスタンス、人数制限をしながら再び青少年芸術学校内での活動が再開されているが、施設内における再開後の様子は違いがある。Aは、「コロナ禍で制作された全ての作品を集めた展覧会を企画している。バラバラになり、孤立してしまった生徒たちが表現活動を通して一体感を感じられる場を設定する必要がある。」と述べ、Bは、「これまで動けないでいた反動から、ダンスや演劇プログラムなどの需要が増えた。また、中断してい

た学校との連携プログラムもスムーズに繋がりが復活して行われている。これらのことは、青少年芸術学校が歩んできた道が正しいことの確認だったと感じている。」と述べていた。Cは、「今、私たちは、子どもたちのために『自由の喜び』をどう再開するか、子どもたちにどうすればここに自由があることを理解してもらえるか、多くの行動制限下にあっても、ここになんらかの自由がある。そうした形を模索したい。」Dは、「多くの学校の校長先生から、いつまた学校が登校禁止になるかわからない中で、美術はそれほど重要ではないという意見も多く出ている。それよりも算術と筆記を学ぶべきである。学校のカリキュラムからアートを削減しようとする傾向があるが、これは正しい選択ではない。なぜなら、学校に行けず孤立していた彼らは、お互いを知ろうとする力と自分を表現する力を養う能力そのものが欠如しており、私たちはそれを育てて行くべきなのだ。」と述べていた。Eからは、「再び、生徒達と触れ合う中で、彼らが力尽きていることに気づく。自由を制限された中でのメディアやオンラインゲームの利用に既に中毒になっている子供や若い世代が増えてきている。コロナによるマルチメディアへの対応の急速な発展は、私たちの創造力や可能性を様々に広げたが、同時に奪われたものもとても多い。状況は未だ厳しいものだ。」と述べた。

III. 研究の成果とまとめ

今回の3年間の研究は非常に内容の濃いものになった。視察訪問では、2種類のホリデープロジェクトを訪れ、生徒たちにとって魅力があり使いやすい専門的な設備環境を見学することができた。現地でプログラムに参加する子ども達や運営者と直に触れ合えたことは、大きな収穫である。あと1年遅ければコロナ禍のパンデミック下では決して実現できなかっただろう。その後の研究から、ホリデープロジェクトの青少年芸術学校における位置づけが分かり、時代の変化とともに様々な対応の柔軟さを持つ青少年芸術学校にとって、最も理想的な芸術教育が展開された形であることが確認できた。確かに、自らの自由意志で参加し、仲間と語り合いながら意欲的に自由な表現活動を謳歌する子どもたちの姿は、エネルギーに溢れていた。文献研究からは、青少年芸術学校の多様であることの強みと、あらゆる芸術表現を全ての児童青少年へ提供しようとする教育理念の骨格を、ドイツ語から日本語表現に変換し、日本語で理解する基盤を作成できたことが非常に大きな成果だった。日本とは異なるドイツの終日学校制における美術教育の実情を理解するための基礎研究もできた。インタビュー調査においては、膨大な量の会話による情報を効率的にわかりやすく包括することは難しく、実態把握に止まった感はある。収集したものを咀嚼して消化することは今後の課題である。しかし、現代に生きる青少年芸術学校の証人達による生きた言葉から、児童・青少年達の「自己の確認と解放」、すなわち「自己の内なる世界と現代社会の両方に対し繋がろうとする力」、「意欲を育て、豊かな表現力を育成すること」の、困難でありながらも実現可能な形について多くの示唆を得ることができた。

〈謝辞〉

コロナ禍の多大な影響を受け非常に困難な教育活動の中にあるにも関わらず、長時間に渡るインタビュー調査に応じてくださった青少年芸術学校校長の、ツィンマーマン先生、ハイドカンプ先生、ヤンゼン先生、リンケ先生、ダビッド先生、そして膨大な量のインタ

ビュー録音の書き起こし作業にご協力下さったウラ・ゲルツさんに心からの敬意を表し、深く感謝申し上げます。

〈参考文献〉

- Mechthild Eickhoff, *Jugendkunstschule. Das Handbuch: Konzepte, Strukturen, Organisation. Ratgeber für kulturelle Initiativen und kulturpädagogische Einrichtungen*, LKD-Verlag, bjke (2003)
- Lydia Rössel, *Jugendkunstschulen, Kindermuseen und Abendeuerspielplätze*, GRIN Verlag (2008)
- bjke e.V., *Phantasie fürs Leben-Jugendkunst-schulen in Deutschland. Ergebnisse der bundesweiten Datenerhebung*, bjke-Verlag (2011)
- Hildegard Bockhorst, Vanessa-Isabelle Reinwand, Wolfgang Zacharias, *Handbuch Kulturelle Bildung*, kopaed (2012)
- Franziska CaBel, *Schlüsselkompetenzen fördern mittels Kunstpädagogik: Das Konzept der Jugendkunstschule als Beispiel für Kunstpädagogik*, VDM-Verlag (2015)
- bjke e.V., *Infodienst-Das Magazin fuer kulturelle Bildung*, Nr.84-Nr.132, LKD-Verlag (2007-2019)
- 山成美穂 (2007), 「学校と学校外が重なる芸術教育現場についての一考察：ベルリンアトリウム青少年芸術学校の『学校プロジェクト』の授業から考える」, 博士論文, 東京藝術大学大学院
- 生田周二、吉岡真佐樹、大串隆吉 (2011), 『青少年育成・援助と教育：ドイツ社会教育の歴史、活動、専門性に学ぶ』, 有信堂
- 久田敏彦監修, ドイツ教授学研究会編 (2013). 「PISA 後の教育をどうとらえるか-ドイツをとおしてみる」, 八千代出版
- 布川あゆみ, 「現代ドイツにおける学校制度と学力問題-進学校の終日化と問い直される役割分担のあり方」, 晃洋書房 (2018)
- 久田敏彦 (監修), ドイツ教授学研究会 (編) (2019). 「PISA 後のドイツにおける学力向上政策と教育方法改革」, 八千代出版
- 大関雅弘、藤野一夫、吉田正岳、山寄雅子、畔柳千尋、山田康彦, 「市民がつくる文化-ドイツの理念・運動・政策」, 水曜社 (2021)

1 この研究報告書では、**Jugendkunstschule** を青少年芸術学校と記載する。

2 ここでは、乳幼児から25歳くらいまでの若者を指す。

3 ノルトラインウェストファーレン州の略

4 **Bundesverband der Jugendkunstschulen und kulturpaedagogischen Einrichtungen e.V./BJKE**

5 このプログラムの芸術部門は、ドイツ側は、ドイツ国際青少年交流協会 **IJAB** の主催により、日本側は、財団法人世界青少年交流協会、独立行政法人日本芸術文化振興会、公益財団法人日本博物館協会、公益社団法人日本バレエ協会の主催を経て、現在は、特定非営利活動法人日本冒険遊び場づくり協会の主催の下に実施されている。

- 6 山成美穂 (2007), 「学校と学校外が重なる芸術教育現場についての一考察：ベルリン・アトリウム青少年芸術学校の『学校プロジェクト』の授業から考える」, 博士論文, 東京藝術大学大学院, pp.31
- 7 Landesarbeitsgemeinschaft Kulturpaedagogische Dienste/Jugendkunstschulen NRW e.V. (NRW 州文化教育機関・青少年芸術学校委員会) の略
- 8 https://www.lkd-nrw.de/lkd/lkd_pdf/Ziele%20JKS.pdf
- 9 Jugend-Kunstschule Rodenkirchen e.V.
- 10 Jugendkunstschule-Kreativhaus e.V.
- 11 Bleiberger Fabrik
- 12 Jugendkunstschule Charlottenburg-Wilmersdorf
- 13 Jugendkunstschule FRI-X BERG
- 14 布川あゆみ著, 「現代ドイツにおける学校制度と学力問題-進学校の終日化と問い直される役割分担のあり方」, 晃洋書房 (2018), pp24.
- 15 Die voll gebundene Form, die teilweise gebundene Form, die offene Form がある。
- 16 KMK は Kultusministerkonferenz の略。常設各州文部大臣会議を指す。